

令和元年6月7日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02792

研究課題名(和文)日本語学習者の口頭能力向上に資する雑談教材の研究

研究課題名(英文)A research for developing web-based Japanese casual conversation materials

研究代表者

才田 いずみ (SAITA, Izumi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：20186919

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、会話の中でも特に目的を持たずに行われる「雑談」を取り上げ、接触場面でのスムーズな展開を可能にする方策を学ぶ教材と練習環境をウェブ上に提供し、世界中の日本語学習者のニーズに応えることを目的とするものである。雑談は単なるおしゃべりであり教育の必要はないと受け止められるかもしれないが、雑談が人間関係形成の上で果たす役割は非常に大きい。

そこで、学習者が日本人と雑談を行う接触場面には、どのような点に問題があるかを実際の雑談データから分析し、雑談が円滑に進められるように、学習ポイントを絞って、ウェブ上で本当の雑談の観察とポイント練習ができるサイトを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本語教育を振り返ると、用件のあるときにどうそれを達成するかについての教育は、話し言葉でも書き言葉でもかなり研究され、十分なノウハウの蓄積がある。それに対して、用のないときに行う雑談については、具体的な指導が行われてこなかった。というのも、雑談のスムーズな達成のために何を教育すべきかが検討されてこなかったからである。本研究はそうした未開拓の分野に先鞭をつけるものであり、実際の雑談の分析から、相手発話に評価の反応を示すことや相手の語りを促すこと、1問1答にならないように自分も積極的に語ること、言いさしへの対応など、教育すべきポイントを明らかにし、ウェブ上に学習サイトを構築した。

研究成果の概要(英文)： It is quite important for a Japanese language learner to equip sufficient competence of conducting casual conversations in Japanese in order to construct good social relationships with Japanese native speakers. As casual conversations do not have practical communicative goals such as asking for a help, offering an assistance, giving advice and so forth, the research on them as well as the teaching material development have been left behind.

During this research period, the author videotaped and analysed real Japanese conversations held by native speakers, native and non-native speakers, and non-native speakers only. In most cases they are the duel conversations in same sex participants, but some are triangular or with different sex participant. Several crucial points to learn were obtained by the analysis and web-based practices were included in the developed web-site called "Zatsudan Meijin" (lit.: casual conversation expert).

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育 雑談 口頭能力 接触場面 反応 評価表現 語り 言いさし

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語教育において、雑談は単なるおしゃべりであり教育の必要はないと考えられているらしく、「依頼」「断り」といった機能を持つ目的のある会話に比べて、圧倒的に扱われる機会が少ない。雑談が上手に展開できれば相手との距離が縮まり、よりコミュニケーションしやすい関係を作ることができるので、雑談が人間関係形成に果たす役割は大きい。しかし、日本語学習者にとって雑談の何が難しいのか、どんな教育を行えば雑談がスムーズにできるようになるのか等、わからないことだらけである。よって、日本語母語話者同士の雑談や、日本語母語話者と非母語話者による雑談などの実例を集めて分析し、問題点の洗い出しから始める必要がある。

来日して学ぶ多くの留学生から、日本人の友だちができないという声を聞くが、雑談をしていて疲れる相手とはあまり話したくなくなるのが人情である。友だちができない遠因には、雑談教育が十分になされていないことが関与しているのではないだろうか。こうしたことが本研究開始の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、会話の中でも特に目的を持たずに行われる「雑談」を取り上げ、日本語母語話者と非母語話者によって形成される接触場面での雑談のスムーズな展開を可能にする方策が学習できるよう、雑談教材と練習環境をウェブ上に提供し、世界中の日本語学習者のニーズに応えることを目的とするものである。雑談が人間関係形成の上で果たす役割は非常に大きい。用件のみの交渉を複数回重ねても一定程度以上の親しさは生じにくいですが、雑談では用件から離れたお互いについての情報が交換されるので、スムーズに展開されれば相互の距離が縮まり、よりコミュニケーションしやすい関係を作ることができる。ポイントは、接触場面で雑談がうまく展開できるかどうかである。その教育を可能にするために、実際の雑談を分析して教材化を図る。

3. 研究の方法

日本語母語話者同士や、母語話者と非母語話者との雑談(接触場面の雑談)、非母語話者同士の雑談(第三者接触場面の雑談)など、雑談の実例を音声のみでなくビデオ撮影による映像つきで収集・分析する。分析の際には、数少ない先行研究である筒井(2012)『雑談の構造分析』の枠組みを用いて、学習者と母語話者との違いや問題点を明らかにする。可能であれば、男女の組み合わせや、学習者のレベル、母語などの違いによって差異が生じるのかどうかについても探る。

得られた知見から教育すべきポイントを抽出し、教材を作成する。教材には、モデルとなるような雑談例と、問題を含む事例を、収集した雑談ビデオのデータから切り出し提示する。問題点がよくわかるように焦点化して脚色した映像などを使用しないのは、何よりも自然でなければ雑談らしさが消えてしまう、という点を重視したからである。仮に「自然」な雑談シナリオを作成することができたとしても、時に母語話者にとって不自然さや違和感を感じさせる対応を含む場合もある台本を、自然に演じることができるような、優れた演技力のある母語話者・非母語話者を得ることは不可能であると考え、作例は一切使用しないこととした。

学習のポイントとなる点については、実例からその部分を切り出し、どのような対応が望ましいかを考える練習問題を作成し、解説を加えてウェブからアクセスできるようにする。

4. 研究成果

雑談の実例を集めて分析した結果、接触場面における問題点としては、才田(2015)でも明らかにした「評価の出現頻度が低い傾向」と「語りへの消極性」に加えて、「語りの促しの不十分さ」と「話題転換の唐突さ」が見られることを確認した。さらに、研究協力者が収集した雑談会話データから、言いさしへの対応が不適切になる傾向が非母語話者の中に見られたので、このことについても才田・稲飯(2019)では併せて検討した。相手発話に対して「評価」したり「語りの促し」を行ったりすることも、相手の言いさしに対して適切な反応をすることも、相手への対応である。この対応を「リアクション」と呼ぶことにした。練習に付す解説等をわかりやすくするためである。「リアクション」という用語自体は、西郷・清水(2018)から借りたが、同書には定義が見られなかったため、本研究では独自に、「リアクション」を、隣接対として型にはまったもの以外の相手への反応と定義した。よって、相づちも「リアクション」の一部である。

雑談に於いて、いわゆる隣接対を成す応答に頼って雑談の談話を構成していくと、伝えたい情報(多くの場合、エピソードといえるような情報のまとまり)を伝えるのに非常に時間がかかる。ある程度のやりとりの中からまとまった情報を呈示する「語り」が現れない場合、その話題は発展性がないとして別の話題に移行するか、雑談自体が終結するだろう。つまり、雑談にとって「語り」への移行や継続が非常に重要になるので、「語りの促し」や「語りの継続支持」を表明すること、自分が語れるチャンスを逃さずに捉えて「語り」を開始することなどが学習項目として重要である。こうした談話の展開にかかる言語行動は、決まった言語表現型で実現されるわけではなく、どちらかと言えば、自分の発話の直前ターンまでの流れが何を志向しているのかを見極めることが必要となる。

たとえば、会話相手が学習者の現在の状況についての質問に答えたのちに、「高校時代はそうじゃなかったんだけど…」と、言いさし表現を用いて別の関連情報を付け加えたやりとりが研究協力者の集めたデータの中にあったが、このときの学習者は、言いさし表現を無視して現状についての回答にリアクションを行っていた。日本語母語話者であれば、おそらく全員が言いさしによって表明された新たな語りへの志向を見て「語りの促し」を行うだろうと思われる。学習者は、言いさし発話を文が完結しない不完全な情報として無視したのではないかと思われる。

このように、これまでの日本語教育における初級・中級（あるいは上級も含むか）で行われてきた、会話に用いる表現形式と機能の関係を重視する教育だけでは、十分な雑談教育を行うことは難しい。もちろん、言いさしの持つ機能についての知識を拡大するというような教育も必要であるが、それ以上に、談話の流れや展開を考慮に入れてリアクションをする力を磨く必要がある。そのためには、今回、本研究者が作成したような「生の雑談」をベースに、展開のきっかけとなる部分や変化が生じる可能性がある部分で、どのようなリアクションが適切になるかをクラスメートと話し合いながら検討していく授業が求められると言えよう。

一問一答的な型にはまったリアクションで済む問題ではないので、臨機応変の対応ができない固定的なウェブ教材では限界がある。今回、ごく一部の雑談にしか練習問題を付けられなかったのは、そうした理由によるが、それを少しでも補うものとして、実例をたくさん見ることがあると考え、ビデオクリップを数多く掲載している。今後は、もっと多くの話者バラエティ、話題バラエティを備えた生の雑談を収集し、それぞれのビデオクリップの中に見られる雑談展開のパターンの違いや、リアクションの違いによって、分類・整理して呈示することが直近の課題である。

<引用文献>

- 筒井道代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
才田いずみ (2015) 「会話力強化のための雑談教材：中間報告」 *Proceedings CASTEL-J 2015*, 169-170
才田いずみ・稲飯亜有美 (2019) 「雑談のポイントとしての「リアクション」」, 日本語教育方法研究会誌 25-2, 76-77
西郷英樹・清水崇文 (2018) 『日本語教師のための日常会話力がグーンとアップする雑談指導のススメ』凡人社

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

- 才田いずみ, 「雑談のコツを考える」, 日本語教育方法研究会誌、査読無、23-2、2017、54-55
才田いずみ, 「雑談会話をういた日本語教材の開発」, *proceedings, International Symposium Commemorating the 130th anniversary of Thailand-Japan diplomatic establishment*、査読無、2017、42-48
才田いずみ, 稲飯亜有美, 「雑談のポイントとしての「リアクション」」, 日本語教育方法研究会誌、査読無、25-2、2019、76-77

[学会発表](計 7 件)

- 才田いずみ, 「日本語学習における雑談を考える - 教材開発の試みとの関連で - 」, *Thammasat University-Tohoku University 2016 International Symposium for Japanese Studies*、(国際学会、招待発表)2016.9.24 タマサート大学
才田いずみ, 「日本語の会話教育と雑談」, 東南大学外国語学院日語系・大学院 特別講演(招待)2017.3.7 東南大学
才田いずみ, 「雑談のコツを考える」, 日本語教育方法研究会、2017.3.18 宮城教育大学
才田いずみ, 「雑談会話をういた日本語教材の開発」, 2017 *proceedings, International Symposium Commemorating the 130th anniversary of Thailand-Japan diplomatic establishment*、(基調講演、招待、国際会議) 2017.11.5 サイアム大学
才田いずみ, 「日本語で上手に雑談をするには」, 海南大学外国語学院日本語学科特別講演(招待)2018.3.13、海南大学
才田いずみ, 「雑談を用いた日本語学習」, *International Symposium "Japanese Language Learning for New Generations"* 2018.9. Juraj Dobrilla University of Pula Faculty of Humanities, Croatia, 2018.9.6 (基調講演、招待、国際会議)
才田いずみ, 稲飯亜有美, 「雑談のポイントとしての「リアクション」」, 日本語教育方法研究会、2019.3.23 (国際学会) 杏林大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.ccis.tohoku.org>

NPO 法人科学協力学際センターホームページの日本語 e-ラーニングの項の下の「雑談名人」に本研究の成果としての教材を掲載。

6 . 研究組織

(1)研究協力者

研究協力者氏名：稲飯 亜有美

ローマ字氏名： (INAI , ayumi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。